Theater Go Round 札幌劇場祭 2015 報告

札幌劇場連絡会会長　藤村智子

TGR 札幌劇場祭 2015は一〇周年の節目の年でした。会期は二〇一五年一〇月三一日から一一月三〇日までの三一日間。札幌劇場連絡会加盟劇場はEVENT SPACE EDITが加わり一〇劇場となり、三九団体が参加し、一四六ステージが行われました。外国から三（ロシア、韓国、フランス）、東京二、旭川一の各劇団が参加しており、上演ラインナップが年々多彩になっているのは嬉しいことです。このうち札幌劇場祭大賞にエントリーした劇団は一八、新人賞は五、計二三劇団が賞に挑戦しました。二〇一五年から審査員を大賞と新人賞の二つに分け、大賞は七人、新人賞は五人の審査員によって審査されました。

大賞にエントリーした一八作品の中から最終候補に、ロシア・サハリンから参加したチェーホフ劇場の「素晴らしい未来」、札幌座「大海原で」、yhs「室温〜夜の音楽」、intro「食卓全景」、RED KING CRAB「BAKA」の五作品が選ばれました。



素晴らしい未来

その結果、一〇周年目の大賞はチェーホフ劇場「素晴らしい未来」が受賞しました。昨年の韓国・ソウルから参加したプロジェクト・アイランドによる「アイランド―監獄島」の受賞に次いで二年連続の外国劇団の大賞受賞となりました。また特別賞にはyhs「室温〜夜の音楽」が作品賞を、RED KING CRAB「BAKA」が企画賞を受賞しました。

チェーホフ劇場「素晴らしい未来」は、死後天使となって天上と地上を行き来する死者（使者）達によって、生きることの意味、今生きていることの大切さを静かに語りかける作品。舞台の背景に据えられた薄暗い鏡が客席を映し、観客もまた冥界の一員となって舞台上で語られることを見守っているような仕掛けも良く、優れた作品でした。



室温〜夜の音楽　撮影：高橋克己

特別賞の作品賞を受賞したｙｈｓ「室温～夜の音楽」は、ケラリーノ・サンドロビヴィッチの脚本でｙｈｓが初めて既成戯曲に挑戦した作品。オリジナルはホラーとコメディーを高いレベルで両立させ、評価の高かった作品だそうですが、ｙｈｓ作品では狂気の部分は成功したが、笑気（？）では必ずしも充分ではなかった印象ですが、全体として狂気と虚無をはらみつつ楽しめる作品に仕上がっていました。

また特別賞の企画賞を受賞したＲＥＤ ＫＩＮＧ ＣＲＡＢ「ＢＡＫＡ」は、障害を持つ人の自立と再生という難しいテーマをハートフルに描いた作品。ＲＥＤ ＫＩＮＧ ＣＲＡＢは昨年「おだぶつ」で新人賞を受賞した劇団で、昨年は新人賞は該当作無しにしようかと論議された中での受賞でしたが、一年後に大きく成長した作品を見せてくれたことは収穫でした。

賞は逃しましたが、札幌座「大海原で」は作品としても、またドラマツルグを置くなど、制作過程でも良い試みを示してくれました。ｉｎｔｒｏ「食卓全景」もポップな舞台美術と脚本・演出のイトウワカナワールドともいえる捉えどころのない家族のありようを描いて魅力的でした。

新人賞にエントリーしたのは、劇団ぱるふぇ「Ｃａｓｅ Ｂｙ Ｓｃａｌｅ」、静と動「二度寝はするけどエイっと起きる」、劇団・木製ボイジャー14号「Ｈｅｌｐ Ｍｅ，Ｍｙ Ａｇｅｎｔ」、さっぽろ学生演劇祭「アニマ」、劇団ロクデナシ「ファーレンハイト」の五本。この中から劇団ロクデナシ「ファーレンハイト」が新人賞となりました。軽くて調子良くてちょっとルーズで気弱でやさしい、そんな今日の若者たちの姿をエンターテインメント性豊かに描きました。

今年は審査員賞が二つ出ました。一つは琴似屯田兵入村一四〇周年記念事業実行委員会「会津藩、かく戦へり」。幕末から明治に変わる激動の時代を生き抜き、やがて屯田兵となって北海道へ渡る会津藩の興亡を史実に沿って描いた作品。渋谷健一脚本、山根義昭演出の息の合ったコンビで見事な群像劇に仕上げました。

二つ目は、人形劇団トランク機械シアター「ねじまきロボットα～ぼくのうまれたひ～」。優れた人形造型と舞台美術で、新しい文明の利器に飛びつき、やがてあっさりと捨ててしまう私達の生活に気付かせ、しかも楽しめる内容でした。

この他、観客が決めるオーディエンス賞は「首位打者」に札幌スクールオブミュージック＆ダンス専門学校の「ＭａｓｔｅｒＰｉｅｃｅ」、「ホームラン王」に演劇ユニット イレブン☆ナインの「どう、しよう、も、ない」に決定しました。オーディエンス賞は観客動員数が多いところに票が集まるのはある意味当然としても、イレブン☆ナインは七ステージの総てがほぼ満席という盛況ぶりで、人気のほどが伺えます。

以上、一〇周年を迎えたＴＧＲ 札幌劇場祭２０１５を概観しました。主催する札幌劇場連絡会は一〇周年企画の一つとして、札幌劇場連絡会奨学制度

「TGRアカデミー」を設けました。舞台芸術に関わる研修の希望者を公募して費用の一部を助成する制度です。札幌の演劇を始めとする舞台芸術に関わる人材育成の一端をささやかながら担う役割を果たしたいと思います。

二〇一六年がすでにスタートしました。この一〇年を土台としつつ従来とは違う次の一〇年を模索したいと思っています。

札幌演劇シーズン　新たな発展に向けて

札幌演劇シーズン実行委員会　事務局長　飯塚　優子

札幌演劇シーズンは、間もなく開幕する二〇一六―冬で九回目を迎える。ここではまず、二〇一五―冬（二〇一四年度）から三回分の参加劇団と作品名を列記する。

二〇一五―冬
札幌座『デヴィッド・コパフィールド』
イナダ組『カメヤ演劇場物語』
新劇場『木に花咲く』
千年王国『ローザ・ルクセンブルグ』
札幌座『蟹と彼女と隣の日本人』

二〇一五―夏
パインソー『フリッピング』
風蝕異人街『青森県のせむし男』
ｉｎｔｒｏ『蒸発』
11☆９『１２人の怒れる男』
札幌座『ブレーメンの自由』

二〇一六―冬
弦巻楽団『ユー・キャント・ハリー・ラブ』
札幌ハムプロジェクト『カラクリヌード』
札幌座『亀、もしくは・・・』
ｙｈｓ『しんじゃうおへや』
コヨーテ『愛の顛末』

これら演目の並びを概観して、次のような現状を読み解くことができる。

二〇一四年度からスタートした演目公募によって、毎回、新たな劇団が選出され、演劇シーズンに参加している。二〇一五―冬の新劇場、二〇一五―夏のパインソーと風蝕異人街、二〇一六―冬のハムプロジェクトとコヨーテが初登場である。

札幌で活動する劇団にとって、演劇シーズンにエントリーすることはどんな意味があるだろうか。演劇シーズンに選定されることがひとつの目標になれれば、ステップアップの動機づけとして役割を持つことができるだろう。また、会場費と大規模宣伝の費用をシーズ